

主 題：嵐の中に輝く主の栄光  
聖書箇所：詩篇29篇

テーマ：主の偉大な力を覚え、この方が受けるにふさわしい礼拝をささげる

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは詩篇29篇です。きょうは母の日だったので少し母の日のものにしようかなとも思いましたが、この箇所を学べば学ぶほど皆さんにとって非常に大切なことが書かれていたので、きょうはここにしたいと思います。聖書をお持ちの方は詩篇29篇をお開きください。この詩篇を通して、きょうはタイトルにもあるように「嵐の中に輝く主の栄光」について考えていきたいと思います。では、まずいつものようにみことばお読みします。

詩篇29篇 ダビデの賛歌

「:1 力ある者の子らよ。【主】に帰せよ。栄光と力とを【主】に帰せよ。:2 御名の栄光を、【主】に帰せよ。聖なる飾り物を着けて【主】にひれ伏せ。:3 【主】の声は、水の上であり、栄光の神は、雷鳴を響かせる。【主】は、大水の上にあります。:4 【主】の声は、力強く、【主】の声は、威厳がある。:5 【主】の声は、杉の木を引き裂く。まことに、【主】はレバノンの杉の木を打ち砕く。:6 主は、それらを、子牛のように、はねさせる。レバノンとシルヨンを若い野牛のように。:7 【主】の声は、火の炎をひらめかせる。:8 【主】の声は、荒野をゆすぶり、【主】は、カデシュの荒野を、ゆすぶられる。:9 【主】の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせ、大森林を裸にする。その宮で、すべてのものが、「栄光」と言う。:10 【主】は、大洪水のときに御座に着かれた。まことに、【主】は、とこしえに王として御座に着いておられる。:11 【主】は、ご自身の民に力をお与えになる。【主】は、平安をもって、ご自身の民を祝福される。」

皆さんは、デイビッド・ホットリーという人物の名を聞いたことがあるでしょうか？多くの方はご存じではないかも知れませんが、彼はストームチェイサー；日本語で“嵐の追跡者”の先駆者、父としてアメリカで活躍し、世界で最も長く竜巻を追った人物としてギネスにも認定されています。現在はもうその働きから退いてはいますが、1956年、高校を卒業したばかりのホットリーは竜巻の魅力に魅せられ、それから約半世紀にも渡って200以上の竜巻を調査しました。実にそのために移動した距離は、およそ120万キロメートル以上とされています。皆さん、考えられます？120万キロメートルです。地球一周が約4万キロメートルと言われているので、彼は地球を30周するほどの距離を、ただ嵐を求めて車を走らせ続けていたのです。容易に想像できるのは、竜巻を追うということには、常にいのちの危険が伴うということです。実際に、5日前にも三人のアメリカの大学生が竜巻を追った結果、事故で亡くなったというニュースがありました。しかし、そんな大きな危険を顧みずに、ホットリーは自分の生涯すべてをささげて熱心に激しい嵐を追い続けていたのです。いったいどうして、彼はそんなリスクを犯してまで竜巻を求めたのでしょうか？何が彼をそこまで駆り立てていたのでしょうか？その理由について、ある時、彼はこんなことばを残していました。「私にとって、それは、嵐そのものの完全な美しさです。嵐の構造そのものが、畏敬の念を抱かせるのです。」嵐に対する畏敬の念、それが彼を動機づけていたものでした。でもどうでしょう？実際に私たちは大きな竜巻を見ることはないにしても、私たちも大きな嵐や台風などを前にして、同じような思いを抱いたことはないでしょうか？突然のように真っ暗に染まる空、激しく吹き荒れる風、バケツをひっくり返したかのように降り注ぐ雨、ゴロゴロと大きな音を立てて光る雷。そのような光景を目にして、いわれもない恐れを抱いたり、その美しさや力強さに心を奪われたりする、そんな経験をしたことはないでしょうか？嵐のあまりの壮大さを前にして、人には到底太刀打ちできないと、自分の小ささや力のなさを覚えたことはないでしょうか？専門家ではないにしても、嵐に対して畏敬の念を抱いたことはないでしょうか？

今回、私たちが見るこの詩篇29篇を記したダビデは、まさにその思いを心の内に覚えていました。彼は、自分の目の前を通り過ぎていく激しい嵐の力強さや美しさに驚愕して心を打たれ、その様子をここに記していたのです。けれども、彼はここで、ただ嵐に心を留めていたのではありません。彼はその嵐の背後におられる存在、嵐よりはるかに勝って力ある存在に心を向けていたのです。そして、その方こそが、栄光にあふれた神様でした。この29篇を最初に読んだとき、皆さんもすぐに気づかれたかと思いますが、ダビデはこの詩篇で同じことばを何度も用いていました。たとえば、このわずか11節のみことばの中に、神様の個人的な名である「ヤハウエ」太文字の「【主】」が18回も出てきていました。ほとんどすべての節にこの「【主】」ということばが使われているのです。またそれだけでなく、特に3-9節の間には「【主】の声」という表現が7回にも渡って用いられていましたし、それに加えて「栄光」ということばも全体を通して4回も出てきていました。「【主】」「【主】の声」そして「栄光」と。ダビデが何に焦点を置いていたかは、言うまでもありません。彼は最初から最後まで、偉大な神様にだけ、ただ神様にだけ目を向けていました。激しい嵐にではなく、その嵐の中で輝く主の栄光を目の当たりにしていたのです。そしてその主の栄光を覚え、心の底からほめたたえていました。ほかのどれとも比べることなどできない、嵐でさえも支配されている、ありえないほどの力強さを備えたそんな主権者なる神様、その方に向かってただ礼拝をささげていたのです。

### ○嵐の中に輝く主の栄光：栄光にあふれた三つの姿

特にダビデはこの詩篇を通して、嵐の中に輝く栄光にあふれた主の三つの姿を描いていました。これからそれを一つ一つ皆さんとともに見ていきたいと思います。そしてそれを見ていく中で、ぜひ今一度自分のこととして考えてみてください。この世界のすべてを支配しておられる神様がどれほど偉大で力あるお方なのか、聖書が明らかにしているその神様の姿をはたして自分は正しく覚えているのかどうか、そして、そのような栄光に満ちた神様に対して、はたして自分はふさわしいほめ歌をささげながら日々を生きているだろうか。このみことばが、神様に対する皆さんの信頼をますます強めるだけでなく、励ましと喜びになることを心から祈っています。

#### 1. 天でほめたたえられる栄光の主 1-2節

栄光にあふれた主の一つ目の姿が1-2節に記されていました。一つ目の姿は、「天でほめたたえられる栄光の主」です。このように書かれていました。「:1 力ある者の子らよ。【主】に帰せよ。栄光と力を【主】に帰せよ。:2 御名の栄光を、【主】に帰せよ。聖なる飾り物を着けて【主】にひれ伏せ。」と。ダビデはまず、「【主】に帰せよ」という同じ動詞を三回、「【主】にひれ伏せ」という動詞を一回用いて栄光ある主に対して礼拝をささげるようにと命じていました。彼は主の前にひれ伏してその栄光をほめたたえることがいかに重要なことであるかを、同じことばをくり返すことによって強調していたのです。ここで「主に栄光を帰せよ」ということばがあります。「帰せ」る、これは、「認める」とか「はっきりと明言する」といった意味があります。では、いったい主に何を帰せるのか？主の何を認めるのか？ははっきりとこう書いていました。それは、主の「栄光と力」、「御名の栄光」でした。それを主に帰せなさいと。言い換えれば、ダビデは神様が栄光に満ちた最高のお方であること、すべてをご自分の意のままにすることのできる強大な力を持ったお方であること、そのことを認めて、その偉大さをはっきりと言い表しなさい、と述べていたということです。主は存在そのものが、世界のすべてを思いのままに支配することのできる主権者、王の王でした。その栄光にあふれた主のご性質を認めて、その主が受けるにふさわしいほめ歌をささげることが求められていたのです。またここで「主にひれ伏せ」と「ひれ伏す」ということばも用いられていました。「ひれ伏す」、これは、「ひざまずいて服従する」という意味を持っています。主人の前で自分の身を低くして仕える召使いのように、聖く正しい偉大な王の王である主の前にへりくだって喜んで服従することが求められていたのです。栄光の主がどれほど偉大なお方な

のかを認めて、その方の前に自らへりくだって礼拝をささげること、それが、ダビデがここで命令として与えていたことでした。

では、ちょっと立ち止まって考えてみてください。ダビデは命令を与えていましたが、そもそもこれらの命令を、だれに対して与えていたのでしょうか？「主に栄光を帰してください、その前にひれ伏しなさい」それを求められていたのは、だれだったのでしょうか？それは1節の最初にこのように出てきました。「力ある者の子らよ。【主】に帰せよ。」つまり求められていたのは、「力ある者の子ら」にでした。このことばは皆さんの聖書の欄外のところにも記されているかと思いますが、別のことばで「神の子ら」と訳すこともできます。では、この「力ある者を子ら」「神の子ら」とは、いったいだれのことを指しているのでしょうか？この点に関して、多くの聖書註解者たちは、これは、御使いたちのことを表していると考えています。どうしてそう言えるのか？それは、このことばが聖書の中で用いられた場合、その多くが天の御座を取り囲む天使たちを指して使われているからでした。たとえばヨブ1：6を見てみれば、そこには、主の前に来て立った御使いたちに対して、「神の子ら」と、ここと同じことばが用いられている様子を見てとることができます。ヨブ1：6を見るとこう書いていました。「ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。」ですから、ダビデは、天にいる御使いたちに対して、「主に栄光と称賛を帰せよ。」と命令を与えていたのです。その場面を少し想像してみてください。天において、御座を取り囲むたくさんの御使いたちが、圧倒的な力を持つ主に対してほめ歌をささげているのです。考えてみれば、この「御使い」と呼ばれる存在も、聖書を見れば、人々が恐れを抱くような力のある存在でした。たとえばザカリヤやマリア、荒野で羊の番をしていた羊飼いたち、イエス様の墓の番をしていた兵士たちのところに御使いが現れた時、彼らは真っ先にどんなふるまいをしていました？彼らはみな、不安を覚えてひどい恐れに駆られていたのです。だから、御使いはまず彼らに対して、「怖がることはありません、恐れることはありません」と伝えて彼らを励ます必要がありました。御使いたちもそのような力を持った存在だったのです。そんな力ある御使いたちが、天で主を取り囲み、この方のすばらしさを賛美しているのです。主の偉大な栄光や力を認めて、自らへりくだって称賛しているのです。すごい光景だと思いませんか？そしてその光景がどんなものかよりわかりやすく描いてくれる箇所があります。それが詩篇89：6-7です。こう書いています。「：6 まことに、雲の上ではだれが【主】と並びえましょう。力ある者の子らの中でだれが【主】に似ているでしょう。：7 主は聖徒たちのつどいで大いに恐れられている神。主の回りのすべての者にまさって恐れられている方です。」ここでも同じ「力ある者の子ら」ということばが用いられていました。状況を少し思い浮かべることができません？天において、王の王である主は、彼を取り囲むすべての者よりもはるかに勝って優れた存在でした。そこには、主に並ぶことのできる存在などいなかったのです。その姿を見ただけで、人の心に恐れを抱かせたような御使いたちでさえ、この主の圧倒的な力強さの前には、あふれんばかりの栄光の前には、この方にひれ伏して栄光を帰することしかできませんでした。これが、この世界の主権者であり、すべての者から称賛とほまれを受けるに値する栄光に満ちた王、主の姿でした。これが主の姿だとすれば、はたして私たちはこの偉大な神様に対して普段どのような態度で、どのような礼拝をささげているのでしょうか？

先週一週間のそれぞれの歩みをふり返ってみてください。職場や家庭にあって、主の偉大さをどのようにして覚えていたのでしょうか？周りにだれもいない自分ひとりの時はどんなふうの主を仰ぎ見ようとしていたのでしょうか？はたして、私たちの心は神様の圧倒的な力強さを、ほかの何物にも比べることのできないそのご性質を、私たちは覚えていたのでしょうか？知恵や力や栄光やほまれ…そのようなものが神様だけのものであるのだということを、心から認めていたのでしょうか？私たちは自らの意思を持ってこの方の前にへりくだり、この方に喜んで従おうとしていたのでしょうか？主権者なる神様を自分の王として仕えていたのでしょうか？それとも、まるで自分自身が王のようにふるまってはいなかったでしょう

か？ダビデはこの詩篇を通して、ただひたすら主に栄光を帰し、この方を礼拝することを求めています。これまで見てきた詩篇とは異なって、ここでは彼はいっさい主に何かを求めようとはしていません。もちろん、神様に何かを求めて祈ること自体が間違っているわけではありません。でもどうでしょう？いったい私たちはいつ最後に、このダビデのように主の偉大な姿を覚えて、ただその主の姿に感謝と喜びだけをささげたでしょうか？ただ栄光にあふれた主が受けるにふさわしい礼拝をささげるということ、それがここで問われていたことでした。

さて、ここまで1、2節とみことばを見てきて、なぜダビデは天の御使いたちに対して神様を礼拝するようにと命じたのだらうと、疑問を抱いた方があるかもしれません。考えてみてください。神様を礼拝するということは、もうすでに彼らが行っていることではありません？そもそも彼らは、神様を礼拝するという目的のために神様によって造られた存在ではありません？では、いったい、なぜその彼らに対して、ダビデは「主に栄光を帰せよ」と口にしたのでしょう？それは、すごく大切なことでした。それは、偉大な神様を前にして、ダビデは自分のささげる賛美がこの方の栄光をほめたたえるのには不十分なものである、と悟っていたからでした。いやもっと言えば、彼は自分が目撃したある光景を前にしたときに、自分自身にはそのすばらしさにふさわしい礼拝をささげることなど到底できない、とそう感じていました。自分は不十分だと思ったのです。だから彼は自分だけではなくて、天にいる御使いたちと一緒に主をたたえようとしたのです。

## 2. 嵐の中でほめたたえられる栄光の主 3-9節

いったいどんな光景をダビデは目の当たりにしたと思います？彼はどんな光景を見たときに自分の不十分さを覚えたのでしょうか？続きの3-9節にその光景が記されていました。ダビデが目撃したもの、それこそが、嵐の中でほめたたえられる栄光の主の姿でした。二つ目の姿は「嵐の中でほめたたえられる栄光の主」です。ダビデはこの3-9節を通して、主の偉大な力、特に自然界さえも思うままに支配する全能なる主権者の姿を明白に記していました。すべての事柄に対して絶対的な権威を持つこの神様は、天においてだけでなく、地上においても、たとえ荒れ狂う巨大な嵐の中にあっても変わることなく、その栄光というものは明らかにされていたのです。どういうことなのか？3節からこう続いていました。「:3 【主】の声は、水の上であり、栄光の神は、雷鳴を響かせる。【主】は、大水の上にあります。:4 【主】の声は、力強く、【主】の声は、威厳がある。:5 【主】の声は、杉の木を引き裂く。まことに、【主】はレバノンの杉の木を打ち砕く。:6 主は、それらを、子牛のように、はねさせる。レバノンとシルヨンを若い野牛のように。:7 【主】の声は、火の炎をひらめかせる。:8 【主】の声は、荒野をゆすぶり、【主】は、カデシュの荒野を、ゆすぶられる。:9 【主】の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせ、大森林を裸にする。その宮で、すべてのものが、「栄光」と言う。」ここでダビデは、嵐が誕生するその場面から、嵐がイスラエル北部から次第に南へと下って行き、そして山を越えて荒野で途絶えている様子を順番に描いていました。まるで嵐の追跡者のように、彼はその嵐の動向を熱心に追っていたのです。少し詳しく見ましょう。まず3-4節で、ダビデは嵐が誕生する様子を描いていました。3節見るとこんなことばが出てきています。「:3 【主】の声は、水の上であり、栄光の神は、雷鳴を響かせる。【主】は、大水の上にあります。」「水の上に」「大水の上」と、「水」というものが出てきていました。ここで特に「大水」ということばが出てきていましたが、これは当時、その地域の人々が知っている中で最大の海であった「地中海」のことを指していました。そして、その地中海の水の上に雲が集まり始めて、大きな嵐へ変わろうと力をつけ始めていたのです。風が吹き荒れ、雷鳴がとどろき、波は荒れ狂い、そこには混沌というものが広がり始めていました。しかし、そんな状況でさえも、その状況を支配しているものがありました。それが「主の声」でした。ダビデは3節の始まりでこんなことばを言っていました。「【主】の声は、水の上であり、」人には制御することのできないような荒れ狂う水の上にも、「主の声」というものが存在していたのです。そんな海の上で聞かれたものというのが何だったか？それは、栄光の神様の力強い威厳のある声、

その神様が響かせる「雷鳴」でした。ダビデは嵐がどンドン水の上で激しくなっていくのを見ながら、その中で、何度も稲妻が走るのを目にし、鳴り響く雷の音に耳を傾けていたのです。彼にとってそれはまるで、嵐の中で神様が雄弁に語っておられるかのように感じるものでした。嵐が誕生するその時にも存在していた主の声。水の上で雲や風を集められていたのは、力ある神様でした。

3-4節で嵐が誕生する姿、水の上に雲が集まって嵐ができる姿を描いたダビデは次の場面で、今度はその誕生した嵐が地上へと上陸していく様子を描いています。次の場面が5-7節でこのように書いています。「:5 【主】の声は、杉の木を引き裂く。まことに、【主】はレバノンの杉の木を打ち砕く。:6 主は、それらを、子牛のように、はねさせる。レバノンとシルヨンを若い野牛のように。」地中海で生まれた破壊的な嵐は、地上へと上陸し、そしてレバノンにやって来たのです。このレバノンというのは、後で地図を見てくださればわかりやすいのですが、イスラエルの北部に位置する場所でした。ですから、地中海でできた嵐はそのままイスラエルの北部のレバノンのところへ移動してきたのです。ここで、5-6節で注目してほしいことばが二つあります。一つはこの5節の後半に出てきていた「レバノンの杉の木」ということば、もう一つは6節の後半に出てきていた「シルヨン」ということばです。レバノンの杉の木とシルヨンと呼ばれる山のことです。パウロはこのようにして自然界の様子をここで描いていました。特にレバノンの杉の木とシルヨンの山の姿をここで描いているのです。ダビデはこれらの自然界のものに触れることでいったい何を伝えようとしたのでしょうか？これは非常に大切なことでした。ということかと言えば、まずここで用いられていた「レバノンの杉の木」は、その大きさと壮大さで世界的に有名なものとして扱われていました。実際にその木はすごく大きなもので、高さは約40メートル、つまり14階建ての建物の高さぐらいになる非常に巨大な樹木でした。そしてそんな巨大な樹木であったからこそ、かつては神殿の柱に用いられることもありました。この当時においてこの木は、強さや威厳や力を象徴するものとして人々の間で扱われていたのです。ですから「レバノンの杉の木」と言ったとき、それは力の象徴でした。でも皆さん、このレバノンの杉の木がここではどうなりました？ここでは、いとも簡単に嵐によって引き裂かれ、打ち砕かれてしまうのです。この木は私たちが台風の時にニュースで見かける暴風にあおられて折れ曲がっているような細いヤシの木ではありません。この木というのは容易に折れることなどない、頑丈で揺らぐことのない力強いものだったのです。しかしそんな頑丈なものでさえ、主の嵐の前には、主の力強い声の前には耐えることなどできませんでした。そしてもう一つ「シルヨン」ということばがありました。この「シルヨン」は別名で「ヘルモン山」とも呼ばれる巨大な山脈のことを指していました。どうしてそのように読むのかといえば、申命記3:9などを見てみればそのように見て取ることができます。「—シドン人はヘルモンをシルヨンと呼び、エモリ人はこれをセニルと呼んでいる。—」ヘルモン山をここに出したのも大切でした。なぜかという、これもこの地域において最高峰の山であり、その巨大さから力や強さ、安定の象徴的存在として扱われるものだったのです。ですから、ヘルモン山を見たときに人々は力を覚えました。その姿に安定というものを見出しました。でもそんなものがどうなったか？そのそびえ立つ巨大な山でさえも、主の嵐を前にしたらすぐに揺らいでしまったのです。6節の最後に書いていました。「レバノンとシルヨンを若い野牛のように。」その前に「はねさせる。」と。どんなに安定していると考えられるものでも、主の声によって、まるで野生の動物がはね回るかのようにたちまち揺れ動いてしまう、というのです。ですからダビデはここでこれら二つのことばを用いて、あることを言わんとしていました。その言わんとしたことは明白でした。驚くほど巨大で力強く安定しているようなものであったとしても、偉大な主の声の前には、激しい嵐の前にはなすすべなど一つもないと。どんなものでさえも、神様の前にはささいなものに過ぎないと。それが「レバノンの杉の木」と「シルヨン」というものを用いてダビデが伝えたかったことでした。嵐は地中海からレバノンを通り、その嵐の中で、まるで火の炎のように雷鳴は鳴り続けていました。全能な

る神様はその中におられたのです。これだけの力を持った嵐でさえも、この方はすべて支配されているお方でした。

そして、また場面が移り変わって、今度は8－9節でダビデは新しい情景を描いていました。海上で誕生してレバノンへと来て、レバノンを通り過ぎた嵐は次第に南下して進んで、カデシュの荒野へとたどり着くのです。このカデシュの荒野がどこにあるのかも、後で地図を見てください。そして、そのカデシュの荒野にやっと到達した嵐はそこで途絶えていました。でもダビデがここで言わんとしたことも結局のところ変わりはありませんでした。この部分で表されていることも主の声というものが相変わらず圧倒的な力を持っているのだ、ということでした。8－9節を見るとこのように書いていました。

「:8 【主】の声は、荒野をゆすぶり、【主】は、カデシュの荒野を、ゆすぶられる。:9 【主】の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせ、大森林を裸にする。その宮で、すべてのものが、「栄光」と言う。」ここで、「【主】の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせ」と訳されていますが、この文を原文そのままにもう少しだけわかりやすく訳すと、「【主】の声は雌鹿に子を生ませる」というふうにも言うこともできます。どういうことなのか？ちょっとこの場面を想像してみてください。お腹に子を抱えた雌鹿がいます。その雌鹿は目の前で、神様の激しい嵐が通り過ぎていくのを目の当たりにします。その嵐が、その主の声があまりにも恐れを抱かせるものであると、雌鹿はお腹にいる子を早産してしまいそうになる、というのです。あまりにもその光景が恐ろしいものであったので、動物たちも早産してしまいそうになると。3－9節の中でダビデがくり返し語ったことは、この嵐というものがいかに強烈なものか、ということでした。さまざまな自然界のものを取り上げていたことも、この嵐が自然界に多くの影響をもたらしていたのだと、はてしない力をこの嵐が持っていたのだ、ということダビデは言わんとしたのです。こうしてダビデはその激しい嵐の姿を、3－9節を通してこと細かく描写していました。

でも、いったい何の目的で彼はここまで詳しく記していたのでしょうか？いったい、なぜ彼は特に3－9節で7回にもわたって「【主】の声」ということばを繰り返し用いていたのでしょうか？それはダビデが重要な真理を教えるためでした。その真理とは、この力強い激しい嵐はほかのだれでもない主ご自身によって生み出され導かれていた、ということです。3節の始めに何が書かれていたか？「【主】の声は水の上にあり」嵐が誕生したところにおられたのは、主でした。主がその嵐を生み出されたのです。そしてレバノンに行った時も、そこには絶えず主の声が聞こえていました。そして、カデシュの荒野に到達する時も、そこには主の声があったのです。巨大な樹木をなぎ倒し、そびえ立つ山を容易に揺るがすほどのそんな嵐を統治する力を、この全能なる神様は確かに持つておられるということです。これほどまでに大きな影響をもたらすことができたこの巨大な嵐を、最初から最後まで完全に支配されていたのは、「【主】の声」でした。世界の主権者なる圧倒的な力を持った神様だけがこのようなみわざを成すことができたのです。その姿をダビデは目の当たりにしました。自然界を一変させるようなそんな嵐を彼は目の当たりにするのです。神様の偉大さを、神様の偉大な力というものを目の当たりにしました。そのものを目の当たりにしたからこそ、それにふさわしい応答をするのです。いったいそれにふさわしい応答とは何なのでしょう？どんな態度を私たちは示すべきでしょうか？

それが9節の最後のところにこう記されていました。「その宮で、すべてのものが、「栄光」と言う。」と。偉大な神様の力を目の当たりにしたときに、私たちがとることのできるたったひとつのふさわしい応答は、この方に栄光を帰することだけでした。1－2節で、天にいる御使いたちが主の栄光をほめたたえる様子が記されていました。そして3－9節を見れば、嵐の中に働く主の偉大な力を目の当たりにしたときに、地上の者たちもこの方の栄光をただほめたたえていたのです。天においても地においても神様の偉大な力を目の当たりにしたものにふさわしい応答は、ただこの方の前にひれ伏して、この方にふさわしい賛美を、礼拝をささげることでした。もちろん私たちひとりひとりも同じです。嵐をも支配



されている神様の主権を覚えるときに、私たちにとって唯一ふさわしい応答は、その神様の栄光を認めて、この方の前にへりくだって礼拝をささげることになるのです。

そうだとすればどうでしょう？はたして私たちはそんな主権者なる方の御力を覚えて、この方にふさわしい賛美をささげながら生きているのでしょうか？はたして、私たちの考えている神様の姿は、みことばが教えている姿と同じでしょうか？それとも、私たちは、何か神様を小さい存在として、何かしら力に限りがあるような存在として見ていないのでしょうか？詩篇29篇が私たちに教えてくれること、それは、人間には絶対に手に負えない自然の力でさえもこの神様がそのすべてのものを支配しておられる、ということです。そしてそれが真理だとしたら、はたして私たちはどんなふうにこの主に日々信頼して歩んでいこうとしているのでしょうか？

もし、この中にまだイエス・キリストをご自分の救い主として信じ受け入れていない方がおられるのであれば、よく考えてみてください。今あなたが逆らって生きている神様は、きょうの詩篇をとおして見てきたこの圧倒的な力を持った偉大な神様だということです。すべてを支配しておられる全能なる王の王であるお方を、今あなたは拒んでいるということです。みことばははっきりと、「神様の永遠の力と神聖というものが、世界の創造された時からこのかた、被造物をとおして明らかにされている」(cf ローマ1:20)と教えています。きょう私たちが見たこの詩篇も、私たちが嵐や雷を見ればそこに神様の存在を見て取ることができる、というわけです。しかし、生まれながらの私たちはみなこの真理を自らの意思で拒んで、神様を受け入れようとはしませんでした。私たちはみなこの神様によって造られたにもかかわらず、この方に従うことよりも、自分の思いのままを生きることを望んでいたのです。だからこそ、本来なら私たちはみなその罪ゆえに、聖なる神様の、この偉大な力を持った神様の正しいさばきを受けて永遠の地獄でさばかれて当然の存在でした。ローマ1:18-19にもこのように記されています。「:18 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。」神様がおられるということ、それは自然界をとおして明らかなのだとおっしゃっていました。そして、明らかなものに対して意志を持って自ら拒むのであれば、この偉大な神様は必ずそれにふさわしい報いを与えられる、とそうおっしゃっています。それがみことばが教えていたことでした。でも、そこで話は終わりではありません。そこには喜びが、希望がありました。

今から約二千年前に、イエス・キリストが救い主としてダビデの町ベツレヘムの馬小屋にお生まれになりました。神の御子が人としてこの地上に来られたのです。この世界に誕生された救い主イエス・キリストは、完全な人であり、また完全な神であるお方でした。だからこそ、その生涯において一度も罪を犯すことなどなかったのです。キリストは神様であるからこそ、罪を犯すこともなければその歩みのうちに一つの誤りをも見出されることはありませんでした。またそれだけでなく、この方は確かにまことの神様であったからこそ、嵐をしずめるという神様にしかできないことをなさいました。思い返せば、マタイ8:24-26にこう書いていました。「:24 すると、見よ、湖に大暴風が起こって、舟は大波をかぶった。ところが、イエスは眠っておられた。:25 弟子たちはイエスのみもとに来て、イエスを起こして言った。「主よ。助けてください。私たちはおぼれそうです。」:26 イエスは言われた。「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。」それから、起き上がって、風と湖をしっかりとつけられると、大なぎになった。」イエス様は、ことばだけで暴風をなぎにされました。確実に、この方は、罪に汚れた私たちとは全く異なる存在でした。この方は、神様でした。神の御子でした。このような力を持ったお方がなされたこと、それは、ご自分を卑しくし死にまでも従い、実に十字架の死にまでも従われたわけです。この方は何の間違ひも罪を犯されませんでした。ですから、死ぬ必要もなければ、苦しみを受ける必要もありませんでした。ましてや十字架にかかる必要などありませんでした。しかし、イエス様が、神の御子がみずからすすんで私たちに代わって十字架にかかってくださり、その血を流してくださいました。本来であれば、

私たちが受けるべき罪の罰をキリストは背負って、罪に対する神様の怒りに耐え忍んでくださったのです。神様の怒りは、私やあなたに注がれるべきものでした。しかし、その怒りをキリストが十字架の上でなだめてくださいました。神の御子が代わりに死んでくださったからこそ、その犠牲をとおして、そしてこの方が三日目によみがえられたからこそ、神様はこの方を信じ受け入れるすべての者に罪の赦しを与えてくださったのです。これが、神様が私たちに示してくださった偉大な愛でした。私たちもよく知っているパウロのことばにこうあります。ローマ書5：8-9を見ると「:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」と。

もし、まだこの神様を個人的に知らない方、イエス・キリストが自分の救い主と知らない方がおられるのであれば、どうかきょう、これまでの自分の罪を悔い改めて、この方を自分の救い主と信じて受け入れてください。どうか、この方が流されたその十字架の血を覚えて、復活を信じて、きょうからこの主のために歩みを始めてください。

神様を愛する者として歩まれている皆さん。確かに日々色んなことが私たちの周りには起こります。喜ばしいこともあれば、心を悲しませたり不安にさせるような問題も起こります。だからこそよく覚えることです。私たちが仕えている神様は、偉大な力を持った、すべてのことを支配しておられる全能の主権者です。私たちが嵐や雷といった自然の力を目の当たりにするとき、私たちは自分たちの無力さや小ささを思い知らされることがあります。しかし、それらをすべて支配しておられるお方がおられます。この世界のすべてをご存じであられ、そしてご存じであるだけでなく、意のままにすることがおできになる圧倒的な力を持った栄光の王、栄光の主がおられるのです。そのような主に対して、私たちはすべてをゆだねて歩いていくことができる、というわけです。すばらしいと思いませんか？嵐の中でほめられたえられる栄光の主。これがダビデの記した二つ目の姿でした。

### 3. ご自身の民に力を与えられる栄光の主 10-11節

そして最後の三つ目の姿が残りの10-11節で記されていました。三つ目の姿は、「ご自身の民に力を与えられる栄光の主」です。10-11節を見てください。「:10 【主】は、大洪水のときに御座に着かれた。まことに、【主】は、とこしえに王として御座に着いておられる。:11 【主】は、ご自身の民に力をお与えになる。【主】は、平安をもって、ご自身の民を祝福される。」ダビデはここで「大洪水」ということばを用いていました。これを読んで、この大洪水は3-9節で見た激しい嵐によってもたらされたものなのではないかと思われた方があるかもしれません。実はそうではありません。ここで「大洪水」と出てきたことばは、ここ以外では唯一、創世記6-11章にのみ使われています。その箇所ではどんなことが記されていましたか？ノアの洪水について記されていたのです。つまり、ダビデはこの詩篇の特に3-9節をとおして山や木を揺り動かすほどの非常に大きな激しい嵐について触れてきましたが、最後にしたことは、読者たちの目を歴史上最も大規模で衝撃的な嵐に、大洪水へと向けていたのです。いったい、なぜそんなことをしたと思います？なぜ彼は最後にノアの大洪水に人々の目を向けたのでしょうか？それは、昔も今もどんな規模の嵐であろうとも、神様が必ずそれらすべてを支配しておられるということを明らかにするためでした。3-9節で見たこの嵐も、あの世界を滅ぼしたノアの洪水でさえも、この神様の御手のうちで起こっていたということです。この方の主権は、昔も今もそしてこれから先も決して変わることはありません。どんな時もどんな規模のものであろうとも、この神様の手に負えないものなど一つとしてなく、いつまでも栄光に輝く王として、この方はすべてのことを統治されているのです。ノアの洪水さえもすべてを支配しておられたのは、神様なのだ。そして、このことが私たちにとって、最高の知らせを、最高の喜びを与えてくれるのです。なぜか？もう一度11節見てください。11節にこんな約束が記されていました。「:11 【主】は、ご自身の民に力をお与えになる。【主】は、平安を



もって、ご自身の民を祝福される。」と。ありえないほど素晴らしいことが書いてありました。なぜ、主がすべての主権者であることが私たちにとって最高であるのか？それは、偉大な力を持ったその主が、私たちに力を与えてくださるというからです。嵐を支配する力を持ったお方が、私たちに必要な力を与えてくださるのだと約束してくださっていました。また、偉大な力を持った主が、私たちに平安を祝福を与えてくださるのだということも記されていました。嵐をご自分の意のままにすることができるそのお方が、たとえ私たちが苦難の嵐を経験していようとも、その中で必要な平安を与えてくださるというわけです。確かに理解できないことは数多くあります。しかし、それらすべてのことをご存じであるだけでなく、そのすべてのことを支配しておられる神様が私たちとともにいて、私たちに必要な力や平安を祝福を与えてくださるのだと。救われて神の子どもとされた私たちというのは、全能なるこの神様のうちに堅く守られているのです。イエス様もこんなことばを語っておられました。ヨハネ10：28で「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」皆さん、これはだれが言ったのでしょうか？だれが、「だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」と言ったのか？それは嵐をしずめることのできた力あるお方、いやもっと言うと、罪と死の力に勝利してよみがえられたそのイエス・キリストが、「だれもわたしの手から、救われた者たちを奪い去るようなことはありません。」と約束してくださったのです。私たちではなく、イエス様が私たちのことを守っていてくださるのだと。そして、その守ってくださる力というのは、この世界のすべてを創造され、その世界のすべてのものを支配されていて、すべてのことを統治されている、そのような偉大な力なのです。私たちが罪から救ってくださったその主は、嵐を支配する力を持ったそのようなお方もありました。この方が、私たちが最後まで信仰のレースを走りきるために、私たちとともにいて私たちを守り導いてくださるというわけです。いっさい限界などない神様の偉大な力によって私たちは支えられているのです。

そうだとすれば、自分の力に頼って生きていくことがいかに愚かなことかと思いませんか？この神様の力が、この神様の知恵が私たちとともにいてくださるのであれば、私たちはこの神様の力に頼るべきだと思いませんか？この方にすべてをゆだねていくことが幸いなことだと思いませんか？そして、私たちがこのように素晴らしい主の栄光と力を覚えるのなら、私たちがこの主のすばらしさを、圧倒的な力を覚えて日々を歩んでいくのなら、私たちにふさわしい応答はただ一つしかないと思いませんか？「【主】に帰せよ。栄光と力を【主】に帰せよ。」「御名の栄光を【主】に帰せよ。」と。栄光の主を礼拝する者として、ますますともに歩んでいきましょう。